

「朝鮮学校コミュニティ」と エスニック・アイデンティティ

——朝鮮学校在学生を対象としたインタビュー調査を通じて——

曹慶鎬

本論文の目的は、日本における民族学校の一つである朝鮮学校在学する者のエスニック・アイデンティティの特徴を把握することである。アイデンティティの深刻な葛藤を抱えるといわれる大多数の在日朝鮮人の若い世代とは異なり、朝鮮学校在学生は強い「民族の誇り」をもち、朝鮮半島の人間を理想としていると指摘されている。だがこれは、朝鮮半島への帰国の準備のためという、当初の朝鮮学校の設定理由に引きずられた理解である。世代交代が進んだ現在の朝鮮学校在学生のいう「民族の誇り」とは、朝鮮半島への憧憬と結びつくものではない。それは、朝鮮学校を重要な結節点とする「朝鮮学校コミュニティ」への帰属に基づいた、自己とエスニシティに関する現状追認的な肯定感であることが、インタビュー調査によって明らかになった。

1 はじめに

本論文の目的は、朝鮮学校在学生のエスニック・アイデンティティの特徴を、インタビュー調査を通じて把握することである。

朝鮮学校は日本における民族学校の一つである。その歴史的な源流は 1945 年 8 月 15 日の終戦後、在日朝鮮人¹の手で開設された朝鮮語や朝鮮史を教える「国語講習所」²にまでさかのぼる。当時、在日朝鮮人の多くが朝鮮半島への帰国を考えていたが、植民地統治時代に生まれ育った者を中心に、朝鮮語や朝鮮史を知らない者が一定数存在し、朝鮮半島で生活を送る上での困難が予想された。そこで朝鮮語や朝鮮史の学習の場が作り出された。そのような行いには、植民地時代から続く民族的抑圧からの解放と民族的尊厳の回復という意味もあった。草の根の寺小屋のような勉強の場は、民族団体（在日本

朝鮮人連盟）らが主となって、学校として体系化されるようになった。だが、当時の在日朝鮮人は日本国籍保有者であった。そのため、義務教育年齢の在日朝鮮人は、日本の教育機関において教育を受ける義務があるという日本政府の方針によって、朝鮮学校は実質的な閉鎖を余儀なくされるか、朝鮮語、朝鮮史の授業は課外授業としてのみ認められる公立学校として日本の学校体系に組み込まれるかした。1952 年のサンフランシスコ講和条約の発効による在日朝鮮人の日本国籍喪失を機に、在日朝鮮人に対する日本学校での教育の義務はないと日本政府の方針が変更され、日本の学校体系のなかに残っていた（公立の）朝鮮学校は、体系から切り離された。

その後は、1955 年に設立された在日本朝鮮人総連合会（以下「総連」）を運営母体とする全日制学校として体系化された。学制は日本の学校制度に合わせて 6・3・3・4（短期 2）制

の全日制となっており、法的には「各種学校」として位置づけられている。2010年4月時点で、日本の小学校に相当する初級学校56校、中学校に相当する中級学校33校、高校に相当する高級学校10校、他に大学相当の大学1校が存在する。運営にあたっては、在日朝鮮人の寄付や地方自治体からの補助金だけでなく、朝鮮民主主義共和国からの財政支援³も受けてきた。だが、全ての在日朝鮮人を教育対象としているため、外国人登録上の朝鮮・韓国籍だけではなく日本国籍その他の学生も在学している。現在の学生数の詳細は未公表だが、1960年代に3万5千人を超えた学生数は、2000年代に入ってから1万人前後になったとも言われている⁴。朝鮮半島への帰国のための準備という学校の設立初期の教育目的は薄れる一方で、「朝鮮民族としての自覚と誇りをもって堂々と未来を切り開いていける人材を育成」(卞・全 1988: 178) するという教育目的は、今も堅持されている。

現在、朝鮮学校で学ぶ在日朝鮮人の割合は同年代のなかでも小さく、大多数の在日朝鮮人は日本学校に通っている。日本学校で学ぶ者の多くが在日朝鮮人同士の関係に乏しく、日本語や日本文化、日本の生活習慣になじみ、朝鮮半島への帰属意識は皆無に等しいともいわれる一方で、朝鮮学校で学ぶ者はこれとは異なる特徴をもっていると一部で指摘されている(福岡 1993; 韓 2006)。端的に、日本学校で学んだ大多数の在日朝鮮人が深刻なエスニック・アイデンティティの葛藤をかかえやすいのに対して、朝鮮学校在学経験者にはそのような傾向はみられない、というものである。だが、これまで在日朝鮮人の若い世代のエスニック・アイデンティティに関しては、各種の調査を用いた把握の試みがあったが、それは日本学校在学生を主た

る対象としてのものであり、朝鮮学校在学経験者を対象としたものは決して多くはなかった。

そこで、朝鮮学校のなかでも朝鮮大学校在学学生を対象にインタビュー調査を行った。本論文はそこで得られたデータを用いて、朝鮮学校在学経験者に特徴的とされるエスニック・アイデンティティについて分析する。記述の順序としては、まず朝鮮学校に関する先行研究については、まず朝鮮学校に関する先行研究について触れた後に、インタビュー・データを分析する上で補助線となる論点を、在日朝鮮人のアイデンティティ形成に関する先行研究と、アイデンティティとコミュニティに関する研究から見出す。その上で、インタビュー・データを分析し、最後にまとめとして結論を提示する。

2 先行研究の検討

2-1 朝鮮学校在学経験者のエスニシティに関する先行研究

朝鮮学校在学経験者らを対象とした調査研究の一つとして、福岡安則のものがある(福岡 1993)。福岡は主に3世以降の在日朝鮮人にインタビューを行い、そのなかで朝鮮学校在学経験者について次のようにまとめる。朝鮮学校在学経験者らの特徴は、家庭の方針にもとづき小学校から高校あるいは大学まで朝鮮学校在学することで、朝鮮語や朝鮮史、朝鮮文化を学んでいることから、「民族の誇り」を内面化しており、その生き方のモデルは、「祖国の朝鮮人⁵」である。そして、彼らのうちの少なくない者が朝鮮学校卒業後も、「在日朝鮮人社会」に帰属することで、在日朝鮮人とのつながりを維持しているという。福岡の指摘は、朝鮮半島への帰国を念頭におきつつ、植民地統治の間に失われた朝鮮語や朝鮮史に関する知識を獲得するために、朝鮮語や朝鮮史の教育を行うという朝鮮学

校の当初の設立目的や、「民族の自覚と誇り」を持てるようにするという朝鮮学校の教育目的と極めて親和的である。一方で、福岡は朝鮮学校在学経験者らも、他の在日朝鮮人と同じようにアイデンティティの葛藤を余儀なくされる状況から自由ではないと指摘する。それは端的に「民族意識」を強固にもつ「祖国志向」タイプの若者であっても、モデルとしての“祖国の朝鮮人”そのものにはなりえない（福岡 1993: 104）からだという。

このような福岡の指摘と並べると興味深いのが、韓東賢の指摘である（韓 2005）。韓は朝鮮学校在学経験を有する小説家を取り上げた分析において、在日朝鮮人である小説家自身と周囲の人々という意味での「朝鮮学校コミュニティ」に対する自己肯定感が強いことを指摘する。韓はそれを「負の自覚」のないエスニック・アイデンティティと暫定的に名付けたうえで、そのようなアイデンティティを形成するにいたる過程での朝鮮学校での在学経験の影響を推測すると同時に、このような朝鮮学校在学経験者の特徴は、決して日本学校在学した大多数の在日朝鮮人にあてはまりうるものではないと指摘する。

「どちらでもない私」といったアイデンティティの揺らぎの中で生きる「在日」という一般的な認識と、マイノリティ意識が薄く「在日」という自明性の中に生きる「朝鮮学校生」のリアリティの間にはかなり距離があるように感じる。（韓 2005: 214）

韓の見解は、ある部分において福岡の指摘と共通するが、異なる部分も存在する。まず、両者ともに朝鮮学校在学経験者がその他大多数の在日朝鮮人とは異なる特徴を示すと指摘する。そして、朝鮮学校在学経験者らの自身のエス

ニシティと自らが学んだ朝鮮学校とその周辺コミュニティに対する肯定感の存在という韓の推測は、「民族の誇り」や「在日朝鮮人社会」という言葉を用いて行われた福岡の指摘と共通する。他方で、福岡にみられる朝鮮学校在学生も規範的モデルとしての「祖国の朝鮮人」にはなりえず、アイデンティティの葛藤を余儀なくされる状況から自由ではないという指摘は、韓には存在せず、ただ「負の自覚」のないエスニック・アイデンティティ」という指摘があるのみである。この違いは、日本と朝鮮半島との間におかれることに起因するアイデンティティの葛藤が、朝鮮学校在学経験者の若い世代においても強く存在するか、否かという論点に集約することができる⁶。だが、福岡の指摘が調査に依拠するものである一方で、韓の見解は調査データなどによって裏付けられていない。本論文では、調査を通して、これらの論点を具体的にみていくことになる。

2-2 分析のための補助線

これまで朝鮮学校在学経験者のエスニック・アイデンティティの特徴に関する先行研究をみた。ここではインフォーマントの語りの具体的検討に入る前に、その補助線となる論考を参照する。まずは、在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの形成過程に関するものとして、浜本まり子の論考（浜本 1996）について検討する。「朝鮮人としての自己意識が形成される一つのモデルを示す」（浜本 1996: 241）ことを目的とするこの論考の考察対象は、植民地時代から日本に居住している朝鮮半島出身者とその子孫であり、かつ自身が在日朝鮮人であるという自覚をもつ者である。このような対象設定は、大多数の在日朝鮮人に共通する特徴を捉えるという意味ではよいが、それとは異なる朝鮮

学校在学経験者の特徴を捉えるのには向かないと予想される。だが、大多数の在日朝鮮人にある特徴のうち、何が朝鮮学校在学経験者にみられないのかを考えることは、朝鮮学校在学経験者の特徴を捉えるうえで有意義であり、そこにこの論考を補助線とする意味がある。

浜本は、すでに在日朝鮮人の若い世代においては、日本人との目立ったエスニックな差異が確認できなくなっており、日本社会に溶け込んで生活しているという点から考察をはじめ。それは「青年期になるまで自分が朝鮮人であることを全く知らない。むしろ、知らされていないケースは、在日朝鮮人の間ではそれほど特異ではない⁷⁾」(浜本 1996: 244-245) という状況である。

このような状況において自らが在日朝鮮人であるという認識を獲得することは、同時に自らが「日本人であることを否定」(浜本 1996: 249) することを必然的に意味する。これが第一の否定であるという。その上で圧倒的な日本人の影響力を前にして、在日朝鮮人の若い世代は自らが在日朝鮮人であることを隠蔽するとされる。これが「日本人でないことを否定」(浜本 1996: 249) するという第二の否定であるという。日本人でないことの否定とは、在日朝鮮人であることの否定である。そこには否定されるべき対象としての在日朝鮮人像の獲得がともなう。それは日本人の持つ朝鮮人のイメージとされる「ニンニク臭い、ずるい、馬鹿だ、劣っている面々。まさに恥ずべき存在としてのイメージ」(浜本 1996: 249) であるという。

まとめると、①在日朝鮮人との関係性の欠如ないしは希薄、②「日本人であることの否定」という意味での第一の否定、③「日本人でないことの否定」という意味での第二の否定、の3点が、この論考から見いだせる在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの形成過程におけ

る重要な点となる。

この論考は、浜本のいう在日朝鮮人の「マイナスのアイデンティティ」(浜本 1996: 249) の形成過程が手際よく整理されており、エスニックな特徴に乏しい現在の在日朝鮮人の葛藤をはらんだアイデンティティをうまく捉えていると思われる。だが、すでにのべたように、この「モデル」は朝鮮学校在学経験者らにはあてはまらない可能性が高い。本論文ではインタビュー・データを見ていくに際して、あくまでもどのようにあてはまらないかという形で、朝鮮学校在学経験者の特徴を捉える一助とすることになる。

このように在日朝鮮人という大きなラベルは同じだが、他の大多数の在日朝鮮人とは特徴が異なる可能性がある朝鮮学校在学経験者に関する分析を進めていくうえでは、内実の共通性がある他の論考を補助線とするのが有用と思われる。そこで先行研究において朝鮮学校在学経験者の特徴として朝鮮学校コミュニティへの帰属が示唆されていることから、コミュニティとアイデンティティとの関係を論じた Charles Taylor (Taylor 1994=1996) の論考を参照し、もう一つの補助線とする。

Taylor は、アイデンティティの承認と関連して、言語コミュニティの存続の正当性を強く主張する。アイデンティティの形成とは必ずしも一人で行われるのではなく、他者(重要な他者)との相互作用のなかでの承認を通じて可能となる。そこで重要なのが言語、それも互いに理解可能な共通の言語ということであり、あわせて、アイデンティティの形成過程において言語を同じくする相互作用の相手の存在を担保する、言語コミュニティの存在であるとされる。

だが、そもそもマイノリティであろうとなかろうと、「アイデンティティと承認」、すなわち自身以外の者という意味での周囲の他者からの

承認とアイデンティティの形成は密接な関係にあり、しかもそれらが人々にとって極めて重要であるということに変わりはない。そのような相互作用が、同じ言語を共有する者らの間で行われる必要があるという点についても同様である。それにもかかわらず、Taylorはその健やかな実現のために、言語コミュニティの存続をことさらに主張する。その理由の一つとして、Taylorの論考の背後に、カナダのフランス語圏であるケベックが想定されていることを指摘するのが明戸隆浩である（明戸2010）。明戸によると、自らの（エスニックあるいはナショナル）アイデンティティの承認において欠かせない、言語を共有する他者の存在は、マジョリティにとっては自明のものであるが、マジョリティの圧力にさらされるマイノリティにとってはそのような相手の存在、ならびにそれを担保するコミュニティの存続は、政治的に主張し続けないと確保されえないということをTaylorは示唆しているという。

Taylorや明戸のこのような知見は浜本の論考と照らしあわせると説得力が増す。浜本の論考では、在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの形成において、エスニシティについてマジョリティである日本人から否定的意味を付与され、それを当のマイノリティである在日朝鮮人が内面化しようということが述べられていた。これは、アイデンティティ形成において、自身が帰属するエスニシティないしはナショナリティに関する認識を、主に自らの集団成員との相互作用のなかで形成するというマジョリティにとって自明のことが、マイノリティにとってはそうではないということを示している事例と捉えなおすことができる。再度、Taylorらの論考に立ち戻ると、たとえ日本社会の圧力にさらされている在日朝鮮人といえども、コミュニティ

に帰属しているのならば、少なくとも、自己のエスニシティ、ナショナリティに関する認識を形成する際の相互作用の相手である自集団成員を確保しうる可能性が高いと考えられる。その場合、日本人からの否定的意味付与を相対的に弱くないしは無効化できるだろう。

このようなTaylorと明戸の論考からインタビュー・データを整理、分析していく上で有用な論点を3点抜き出す。まずは言語コミュニティへの帰属の有無という観点から①コミュニティ体験の契機、次に自らが帰属する②コミュニティの評価、最後にそのような③コミュニティの存続について、である。先に見た浜本の論考から導き出したエスニック・アイデンティティの形成過程における重要な点とあわせて、インタビュー・データを整理、分析していく。

3 インタビュー・データの整理と分析

3-1 インフォーマントの基本属性

インタビュー・データの整理に先立ち、具体的な調査対象の設定と、インフォーマントらのいくつかの基本属性について述べる。本論文では朝鮮学校のなかでも高等教育機関に相当する朝鮮大学校在籍学生を調査対象者に設定した。朝鮮大学校は各地の朝鮮学校の教員を養成するために、1956年に2年制の大学として東京都北区十条台にある東京朝鮮中高級学校の敷地内に設立された。1958年には小平市の新校舎に移転、4年制に改編され、1968年4月には各種学校として認可されている。2004年時点では8学部体制の全寮制で運営されている（朝鮮大学校2004:2）。法的位置づけは他の朝鮮学校と同様に「各種学校」となっており、そのため、大学を卒業したとしても厳密には学校教育法上の「大学」卒業資格を取得することはできない。

在学人数は公表されていない。

朝鮮大学校在学学生のほとんどが朝鮮学校高級部卒業生であり、さらにはかなりの割合の者が初級部より朝鮮学校で学んできた者たちである。すなわち、彼らは最も長い朝鮮学校在学経験を有するわけであり、朝鮮学校に通うことから生じるだろう特徴を色濃く備えていると想定できる。彼らを調査対象とする理由がここにある。

このような学校で学ぶ学生 21 人に、エスニック・アイデンティティの形成とコミュニティへの帰属についてインタビュー調査を行った。調査に際して、アイデンティティの形成とコミュニティへの帰属に関連する質問を用意したほかに、インフォーマントが望むことを話す時間を多分に用意した。実際に調査を行った時期は 2004 年である。インフォーマントの主な属性は表 1 のとおりである。

インフォーマントはこれまでの教育課程において留年や浪人などは経験せず、最短年限で進学している。そのため、年齢は 18 歳から 22 歳までの間に収まっている。

全員が 3 世以降の世代であるインフォーマントらは、これまで初級部から一貫して朝鮮学校で教育を受けてきており、日本学校に在学した経験は有していない。注目すべきは親の朝鮮学校在学経験である。両親ともに朝鮮学校在学経験を有するというのが 16 人、片親のみというのが 5 人、結果、21 人の全インフォーマント

の親が朝鮮学校在学経験を有していた。これは朝鮮学校在学経験者らのなかで世代的再生産が進んでおり、現在の在学学生のうちの多くが朝鮮学校在学経験者の子供であるということを示唆している。インフォーマントらが朝鮮語や朝鮮史をそれほど知らない親のもとで育ったのではなく、「朝鮮民族としての自覚と誇り」をもてるような教育を受け、朝鮮語や朝鮮史をある程度理解する親のもとで育ったということである。

幼少時の居住地は、1 名を除く他のインフォーマントの全員が、在日朝鮮人の人口密度が相対的に高いという意味での集住地域ではなかった。このような在日朝鮮人非集住地域では、道を歩いて偶然に在日朝鮮人と出会って知り合いになるということは、ほばないに等しい。ましてや、在日朝鮮人の友人などは「自然」にできるものではない。

このようなインフォーマントらから得られたインタビュー・データを、先行研究の検討から得られた論点と照らし合わせて整理、分析していく。まずはアイデンティティの形成過程に関する論点についてであり、次に、コミュニティとの関係についてである。

3-2 アイデンティティの形成過程に関する重要な点について

まずは、アイデンティティの形成過程に関する論点として先行研究から導いた、①在日朝鮮

表 1 インフォーマントの基本属性一覧

年齢（インタビュー時）	18 歳～22 歳
性別	女性 6 人／男性 15 人
世代	3 世 19 人／3.5 世（一方の親が 3 世） 2 人
日本学校在学経験	なし
親の朝鮮学校在学経験	一方の親のみ 5 人／両方の親 16 人

人との関係性の欠如ないしは希薄、②「日本人であることの否定」という意味での第一の否定、③「日本人でないことの否定」という意味での第二の否定、の3点に着目してインフォーマントの語りを整理する。

①在日朝鮮人との関係性の欠如ないしは希薄
まずは在日朝鮮人との関係性についてである。そもそもインフォーマントらは朝鮮学校に在学しているので、在日朝鮮人との関係性が欠如しているはずもない。インフォーマントらは朝鮮学校で日々の学生生活を送るなかで、当然のように在日朝鮮人同士の関係を築いている。朝鮮学校での人間関係の性質に関しては下のような語りがある。以後、インタビュー・データに限り、引用末に性別とインタビュー時の年齢を記す。

良い友人が集まるって言ったらかわいいですけど、友人関係では朝鮮学校がとってもいいと思います。やっぱり父親とか見ている、そういう学校時代の同級とまだつきあっているじゃないですか。社会に出ても、つきあいがある友人っていうのは、やっぱり貴重だと思います。(男性／20歳)

ここで朝鮮学校での在日朝鮮人同士の関係性の特徴の一つとしてあげられているのは、友人関係の親密さである。さらに重要なのは、朝鮮学校在学経験者である自身の親の姿などを通して、朝鮮学校での友人関係の親密さが在学期間だけに限られるのではなく、卒業後も持続しうることを知っていることである。別のインフォーマントは、親密な友人関係というものは同級生同士の関係に限られるのではなく先輩後輩にまでおよぶことを指摘する。また、学生に限らず教員との関係も密であることがうかがえる。

たとえば「よい先生」と出会ったと述べるあるインフォーマントは、朝鮮学校での教員と学生との関係を、某有名ドラマと照らし合わせて「金八先生とか、そういう関係みたい」(男性／21才)と表現する。

このような学校内の関係性として、「友人」と「教員」との親密さに関する何らかの肯定的意見は、全てのインフォーマントから聞くことができた。先輩・後輩を含んだ「友人」と「教員」ということは、朝鮮学校に存在するほとんどの人間と親密な関係を築きうるということになる。しかも自身の両親の姿を通して、朝鮮学校での親密な関係が、卒業後にも継続することを期待しているわけである。先行研究で述べられたような、在日朝鮮人との関係性の欠如ないし希薄ということが、朝鮮学校在学中のインフォーマントにあてはまらないことは明らかだ。

ただしインフォーマントらの幼少時の居住地域を踏まえるに、このような在日朝鮮人同士の関係は、家族内のものを除くと、朝鮮学校に通学を開始して築かれたものである可能性が極めて高い。実際、ほとんどのインフォーマントは、朝鮮学校に通学をはじめてから、家族・親族以外の在日朝鮮人の知り合い、友達ができたと言っている。

②「日本人であることの否定」という意味での第一の否定

次に「日本人であることの否定」という意味での第一の否定をみる。これは日本人であるという自身の認識が否定され、自身が朝鮮人であるという認識を獲得する契機であった。これと関連して、自身が在日朝鮮人であると認識した契機はいつかと、インフォーマントに質問すると、「ごく自然に」(女性／19歳)、「気づいたら」(男性／20歳)といった答えが返ってきた。要するに帰属の変更に関する記憶があいまいな

のだ。さらにはインフォーマントのなかには率直に、問いそのものに対する当惑を表明するものもいる。典型的な語りが次のものである。

え？ 物心ついてからですか？ やっぱり自分の意思でしゃべったりするようになってから…。…俺が保育園は日本の保育園なんです。その保育園のときも朝鮮って知っていたんです。2歳ぐらい？ え？(男性／21歳)

2歳のときから自身のエスニシティを認識していたか否かに関する詮索はここではしない。重要なのは、思わず返してしまった答えが信憑性に欠けるということに、この問いに対するインフォーマントの当惑が表れていると思われることである。これは、現在の地点から過去を振り返って、一貫性をもった形で自己のエスニックな帰属を語りうることの裏返しと思われる。当然のごとく「日本人であることの否定」という契機そのものが存在しない、すなわちエスニックな帰属の移行に関する認識がないのである。

ここでも留意すべきは、インフォーマントは朝鮮学校入学前までは、家族・親族を除いた在日朝鮮人との関係が欠如ないし希薄な状況にあったという点である。それにもかかわらず、自身の帰属の一貫性を事後的に構成しようという点に、家庭での親などの影響力と、朝鮮学校での体験の影響力の大きさを感じさせる。そして、家庭で影響力を及ぼすインフォーマントの親も、その多くがすでにみたとおりに朝鮮学校卒業生だったということから、そこにも朝鮮学校在学経験の影響を推測することができる。

③「日本人でないことの否定」という意味での第二の否定

「日本人でないことの否定」すなわち「在日

朝鮮人であることの否定」という契機についてみる。「在日朝鮮人であることの否定」とは、自身が在日朝鮮人であることに対して否定的評価をくだすことである。そこでインフォーマントらの語りのなかから、自身が在日朝鮮人であることに関する評価を整理する。

すでにのべたように、インフォーマントらは自身の朝鮮学校での経験と、朝鮮学校在学経験を有している親の姿などを通して、在日朝鮮人との関係を築き、それを肯定的に捉えていた。それでは、自身がそのような在日朝鮮人であることに関するインフォーマントの語りにはどのようなものがあるか。最も多かったのが、「在日朝鮮人でよかった」(男性／20歳)といった語りである。だが、その根拠となるものはかならずしも明示されない。

…どういったことですかねえ。ははは…。これだっていうのはないです。ただ、なんとなく。(男性／21歳)

このインフォーマントは、自身が在日朝鮮人であることについて肯定的評価を下している。その上で、その根拠については明示できず、笑ってごまかそうとさえする。少なくともここには深い自省を通して導き出された理路整然とした根拠はなく、単なる現状肯定にもみえる。そして、このような答えの現状肯定的な性格は、その根拠のみならず、帰属の評価そのものでも見られる場合がある。それは次のような語りになる。

在日朝鮮人で生まれたから、在日朝鮮人で良かったんじゃないですか？ 日本人で生まれたら日本人でよかったと思うし。アメリカ人で生まれたらアメリカ人で。(男性／20歳)

ここでは、自己の帰属に対する肯定的評価が単なる現状肯定にすぎないことが、あからさまに表われている。このような傾向は、たとえば朝鮮半島の朝鮮人と照らし合わせた上での自身の帰属の評価にも表れる。

日本に住む在日で良かったとは思いません。…朝鮮で生まれていれば、よくわかりませんが、こっちで生まれたから。(男性／21歳)

ここには朝鮮半島本国やそこで暮らす朝鮮半島の人々に対する羨望のまなざしもない。少なくとも朝鮮半島の間人を規範的モデルとはしていない。同時に、在日という状況に対する過剰な意味付与もない。これらの語りが示すのは、インフォーマントらはどこの地域で生まれるか、何人として生まれるか、ということに対して現状を追認し肯定する傾向にあるということである。

ここまでアイデンティティの形成に関する論点について、インフォーマントらの語りを整理してきた。そこで明らかになったのは次のとおりである。①そもそも日本社会のなかで孤立するのではなく、朝鮮学校在学経験を通じて在日朝鮮人との広く深い関係をもっている。②「日本人であることの否定」という契機も存在しない、彼らの認識は自身らの在日朝鮮人への帰属の一貫性を事後的に構成しうるものである。③「日本人でないことの否定」という契機も存在しない、彼らは自身が在日朝鮮人であることを肯定的に評価しうる。だが、その評価の根拠は必ずしも明確なものではなく、現状追認的な性格が色濃いものであり、朝鮮半島の間人を規範的モデルとみなすこともなければ、在日という状況に対して充足しているが、過剰な意味付与をするものではなかった。

事前の想定どおり、インフォーマントらのこのような傾向は、大多数の在日朝鮮人のアイデンティティの特徴として浜本の論考で示されたものとは、あきらかに異なる。少なくとも浜本が想定した「マイナスのアイデンティティ」などではない。自身の帰属の一貫性を事後的に構成し、しかもそれについて現状追認的に肯定的評価をくだせるというものは、マイノリティのアイデンティティの特徴というよりは、マジョリティのそれに近い。そもそも浜本の論考で対象とされている在日朝鮮人は、日本社会のなかで他の在日朝鮮人との関係に乏しい状況にあるものと推測されていた。朝鮮学校とそこから広がる在日朝鮮人との親密な関係を有するインフォーマントらに、全くあてはまらなかったのも当然ではなかろうか。そこで、アイデンティティとコミュニティに関する Taylor らの論考から得られた論点と照らし合わせながら、コミュニティに関するインフォーマントの語りを詳細にみていく。

3-3 コミュニティへの帰属とその存続について

インフォーマントらが語る朝鮮学校での人間関係の延長線上にあるものが、先行研究で「朝鮮学校コミュニティ」、「在日朝鮮人社会」といった名称で示されたコミュニティと重なると思われる。そこで、ここではコミュニティに支えられたマイノリティに関する論考を補助線として、インフォーマントとコミュニティの関係について、インタビュー・データを整理、分析していく。まずは①コミュニティ体験の契機と②コミュニティの評価についてまとめた後に、③コミュニティの存続について記述する。

①コミュニティ体験の契機

インフォーマントとそのコミュニティとの関

係を把握する最初の手がかりとして、コミュニティ体験の契機について聞いた。答えのひとつが、以下の語りである。

体育大会をすると、必ず学父母とか見に来て。一大イベントじゃないですか。絶対に学父母が来て。…そういう姿を見て、「おお、同胞社会だ」って鮮やかに思います。芸術大会があると。…そういうがあると、絶対に見に行くとか。(男性 / 22 歳)

体育大会と芸術大会というのは、「在日朝鮮学生中央体育大会」、「在日朝鮮学生中央芸術競演大会」といった、日本各地の朝鮮学校の在学がサークル活動の成果を競い合う大会のことである。このインフォーマントは、そのような場での、学生だけでなく保護者を含めた盛況に接したことを、コミュニティ体験の例として述べている。スポーツ大会という点では、1994 年以降、全国高等学校体育連盟により朝鮮高級学校の高校総体への参加が認められたことから、朝鮮学校も日本学校が参加する公式戦に出場できるようになった（在日本朝鮮人教育会中央常任理事会編 1996: 209）。その日本の全国大会のある種目に、ある地方の朝鮮学校が出場するようになった場合、それを他の地域の朝鮮学校関係者からも応援することもあるといい、実際に応援に行ったことがあるインフォーマントは、そこで見た賑わいをコミュニティ体験の一例としてあげている。ここで浮かび上がるのは、在日朝鮮人同士のつながりという意味での在日朝鮮人コミュニティ体験を可能にする、結節点としての朝鮮学校の存在である。要するに、インフォーマントが語る在日朝鮮人コミュニティの体験の契機とは、朝鮮学校を媒介とするものであり、そこでの人間関係の延長にある

ものみてよいだろう。

②コミュニティの評価

それではインフォーマントらはコミュニティについてどのような評価をくだしているのか。その代表的な語りの一つが次のものである。

在日同胞については、結構、私は暖かいっというか。特に地域が同じところでは。同胞はみんな知っているじゃないですか。…朝鮮大学に入って感じたんですが、友人が親戚の友人の子供だったとか。…それと姉とかの話を見ると、商工会の実習に行って、同胞の家とか行くと、在日朝鮮人というだけで、暖かく歓迎してくれるじゃないですか。そういうところがいいというか、仲むつまじいって思いました。(女性 / 20 歳)

このインフォーマントが地域の在日朝鮮人を実際に全員知っているかはともかくとして、そのような実感をもっていると語れてしまうということが重要と思われる。次に朝鮮大学校入学以降として、そこで出会った友人が実は親戚の知り合いの友人であったという話になる。これは「地域」の濃密な人間関係が朝鮮大学校という場を通して他の地域（日本全国）へと拡大していくことを示している。さらに、そのような学校という場につくられた関係は学生同士のものに限られず、その背後の親・親戚同士を巻き込んだものへと拡張されることを示唆する。そして、その範囲は親族にとどまらない。姉（姉も朝鮮大学校在学経験者）や先輩たちの体験談として、在日朝鮮人の商工会での実習に際しても、出会ったこともない人間が初対面から歓迎してくれるというくだりは、朝鮮学校を契機として学校外へと広がる関係性が親族に限

られないものであることを示唆している。

このような肯定的評価は全てのインフォーマントが語っている。その典型的表現は「在日同胞社会のイメージっていうのは、でっかい家族みたいな感じ」(男性／21歳)といったものである。

③コミュニティの存続

ここまで、インフォーマントらが朝鮮学校での体験を通してコミュニティへの帰属意識をもち、それに肯定的評価をくださうことが明らかになった。だが、インフォーマントらにコミュニティ体験を可能とさせる当の朝鮮学校の存続は、自然と確保されるものではない。実際、インフォーマントもその点は認識している。そして、なかには朝鮮学校の存続のために何らかの貢献を考えるインフォーマントもいる。

朝鮮大学校在学学生であるインフォーマントにとって、貢献の一つの手段は、自身が教員になることである。各地の朝鮮学校の教員養成という、朝鮮大学校の当初の設立目的と照らし合わせても、それは決して不可能なことではなく、現在も朝鮮学校で教鞭をとることを検討する朝鮮大学校在学学生は決して少なくはないという。だが、同時に朝鮮学校の運営の厳しさもあって、実際の教員のなり手は少なくなりがちであるという⁸。そのため優秀な学生は教員になることを積極的に勧められたりもするという。自身の進路希望は教員とは全く別のところにあるが、同時に教員への誘いを受けているというあるインフォーマントは現在の心境を次のように述べる。

私、自分の母校が好きだし、地域の同胞が好きだし。狭い社会だから、知っている人がほとんどだから、私が運動会に行ったときも、「実習で帰ってきていたんだ」って、ひさしぶりに会った友人の母とか、誰その母とか

が、たくさん、そうやって私に声をかけてくれるし。…そう考えると、学校教育っていうのは、本当に重要だし。みんなが集まるところって言ったら、やっぱり学校だし。学校を拠点に活性化していくし、同胞社会も。そう考えると…自分に関係ないことではないでしょう。(女性／21歳)

この語りには、コミュニティの存続における朝鮮学校の重要性に関するインフォーマントの認識が如実に示されている。このインフォーマントは、朝鮮学校の維持に教員として関与すべきか、逡巡していると吐露している。誰かが教員をやらないと朝鮮学校の維持に差し障る。だからこそ、本来は別の進路希望をもっているにもかかわらず、教員の誘いを無下に断りきれないとインフォーマントは言う。他のインフォーマントも程度は違うが、コミュニティの結節点といえる朝鮮学校の維持・存続に関心を寄せており、何らかの貢献を希望していた。

ここまでコミュニティへの帰属とその存続のための貢献について、インフォーマントらの語りを整理してきた。まず①コミュニティ体験の契機という論点に関しては、朝鮮学校在学学生であるインフォーマントらは自らが帰属するコミュニティの存在を語る事ができていた。それは朝鮮学校と関連した体験を主たる契機とするものであり、コミュニティの成員も親に代表される卒業生を含む朝鮮学校関係者らを主とするものである。このコミュニティは文字通り「朝鮮学校コミュニティ」と言い換えてよいだろう。先行研究を参考に考えるならば、コミュニティに帰属しているマイノリティであるインフォーマントらは、エスニック・アイデンティティの承認をコミュニティ成員内部で相互供給しえてきたと推測できる。それゆえに、②コミュニテ

イの評価という点では、インフォーマントらは自身だけでなく帰属先のコミュニティに関して肯定的評価をくだしていた。そして、③コミュニティの存続については、自身が帰属する朝鮮学校を結節点とするコミュニティが自然に存続するわけではないことを知っているからこそ、インフォーマントらはその存続のための貢献に強い関心をよせるということが明らかになった。

このようなコミュニティをめぐるインフォーマントらの特徴は、自身が在日朝鮮人であることに肯定感を示していたことと併せると、先にみた Taylor らのコミュニティとアイデンティティの関係に関する論考とかなりの部分で合致する。すなわち、マジョリティからの否定的評価とは別に、自己と自集団に関する肯定的評価を下しえたのは、同じコミュニティに帰属する在日朝鮮人との相互作用のなかで自集団を認識し、評価することが可能だったからと推測できる。さらには、インフォーマントらがコミュニティの存続に必要な朝鮮学校のために何らかの貢献を行うことを考えていたことなどは、Taylor や明戸の論考で示唆されていたコミュニティの存続の主張という論点に連なるものといえる⁹。

4 まとめ

本論文では、他の在日朝鮮人とは異なる特徴を備えるといわれる、朝鮮学校在学生のエスニック・アイデンティティとその形成過程について、インタビュー調査の結果を用いながら記述した。

インフォーマントらは、朝鮮学校在学経験者である親のもとで育ち、物心ついたときから朝鮮学校で学んでいる。そのため、主に日本学校で学んでいる大多数の在日朝鮮人とは異なり、インフォーマントには自身のエスニックな帰属の変更に関する認識がなく、自身が在日朝鮮人

であることを否定的に捉えることもない。それでいて朝鮮半島の人間を規範的理想にすることもほとんどない。そんな彼らのエスニック・アイデンティティを占めるのは、在日朝鮮人として生まれた自身を現状追認的に肯定しているという意味での「民族の自覚」である。言い換えるなら、インフォーマントらは朝鮮半島や日本とも深刻な葛藤を抱えていないがゆえに、両者に対する過剰な意味付与を必要とせず、さらには在日という状況についても現状追認的な肯定感を示すにとどまる傾向にある、ということである。これは（エスニック・）マイノリティのアイデンティティの特徴というよりは、マジョリティ一般のそれに通じるものといえる。

このような特徴を示すインフォーマントらの背景には、朝鮮学校での濃密な人間関係と、その延長にあるコミュニティの存在があった。朝鮮学校在学経験者である親をも巻き込んだそのコミュニティは、朝鮮学校在学経験を主な成員とし、朝鮮学校を重要な結節点とするという意味も込みで「朝鮮学校コミュニティ」と言い換えうる。インフォーマントらが、在日という状況について現状追認的な肯定感を示すことができたのも、コミュニティに帰属することで、自集団成員らの間の相互作用を通して、自己が帰属するエスニシティに関する認識を形成することが可能であったことと関連するであろう。それゆえに、彼らはコミュニティの存続に一定の関心を示し、なかにはそのための具体的貢献を考える者もいる。

ここまで他の大多数の在日朝鮮人とは異なる、朝鮮学校在学生の特徴についてまとめた。補足として、在日朝鮮人に関する言及において必ずといってよいほど触れられる、被差別体験や被差別意識に関して、朝鮮学校在学生はどのような特徴を示すのか述べる。まず指摘してお

きたいのは、インフォーマントのなかで被差別に関する典型的な語りとしてあるのが、「個人のつきあいとしての、そういう差別は、ぼくはないと思っています」（男性／21歳）というものである¹⁰。だが、このような差別を否定する語りはあくまでも、「個人のつきあい」という言葉で代表されるような、日常生活での対面を主とするコミュニケーションに限定されていることに注意する必要がある。別の局面については、インフォーマントらは差別の存在を示唆する。それは朝鮮学校に対する「助成金」（女性／20歳）の不足や、朝鮮学校卒業生が「大検を受けたり」（男性／21歳）していたという指摘である。これは、現在まで続く朝鮮学校に対する行政からの財政支援の不足や、かつては日本の大学への進学を希望するおりに、ときに「大学受験資格」の取得を余儀なくされたことを指している（在日本朝鮮人教育会中央常任理事会編 1996: 59）。これらはいずれも日本社会における朝鮮学校の制度的処遇に関するものである。要するに、大多数の在日朝鮮人にとっての主たる被差別の一つが対面的コミュニケーション上のものであるとするならば、朝鮮学校在学生にとってのそれは主に朝鮮学校をめぐる制度的なものと言える。

察するに、コミュニティに帰属し、コミュニティと自身に対する肯定的感情をもちえるインフォーマントらであるからこそ、日常生活での対面的コミュニケーションといった局面での被差別体験に鈍感であるが、コミュニティの結節点である朝鮮学校に対するマジョリティからの圧力に対しては相対的に敏感になると思われる。そして、朝鮮学校関係者による朝鮮学校の維持に関する日本社会への異議申し立ては、単に教育という範疇に収まるものではなく、アイデンティティ形成の重要な条件となるコミュニ

ティの存続に関する主張を含んだものと推測される¹¹。

注

¹ 本論文では、外国人登録上の「朝鮮」「韓国」の表記にかかわらず、植民地時代の朝鮮半島に起源をもつ人々を「在日朝鮮人」と総称する。なお、当節の朝鮮学校の歴史に関する記述は、金徳龍（金 2004）と卞喜載・全哲男（卞・全 1988）、ウリハッキョをつづる会（ウリハッキョをつづる会編 2001）らの研究に依拠している。

² ここでの「国語」とは、朝鮮語をさす。

³ 1950年代に始まった朝鮮民主主義人民共和国からの日本における民族教育に対する教育援助費は、1970年代にピークを迎えるも、1980年代末から減少傾向にある。2010年4月21日付『朝鮮新報』によると、2010年4月の時点での累計額は、約466億円とある。

⁴ 1960年代の学生数は金（金 2004: 274）による。現時点での朝鮮学生在学生数は、2010年11月9日付『毎日新聞』によると約8,800人であるという。

⁵ ただし、これは何も朝鮮半島に実在する「祖国の朝鮮人」である必要はなく、あくまでも「生き方のモデルとして思い描くイメージ」（福岡安則 1993: 103）であるという。

⁶ 本論文は朝鮮学校在学生を対象とした調査から得られたデータを利用して書かれているが、調査のおりに調査者である本論文執筆者が朝鮮学校卒業生であるということを、インフォーマントに対して伝えている。このことから、インフォーマントが調査者を朝鮮学校在学経験を有するという意味での内集団成員とみなした可能性がある。一方の福岡が得た調査データは外集団成員（とみなされたであろう、福岡）に語られたものである。このことから両者の調査データの性質は厳密には異なり、それは調査データを用いた分析の結果の異同

にも表れている可能性がある。これに関する詳細な検討は別の機会に行いたい。

⁷ 在日朝鮮人であることを知らない在日朝鮮人の若い世代の存在は他の論者たちにも指摘されている（たとえば岡真理 2000: 100-102）。また在日朝鮮人学生の感想文集の類でも散見できる（たとえば『セフルム』編集委員会 2004）

⁸ 朝鮮学校の財政的苦境については、多くの先行研究でふれられている（ウリハッキョをつづる会編 2001; 金徳龍 2004）。なお、朝鮮学校の財政状況の悪化は、ここ数年だけの問題でない。確かに近年の状況の悪化は著しいが、設立当初から状況は良くなかった。

⁹ 留意すべきは、Taylor が述べる言語コミュニティと、インフォーマントらが述べるコミュニティが全く同一であるとは限らないことである。両者の間の詳細な異同について確認していくことも重要な研究主題の一つだろうが、この点に関しては紙幅の都合

もあるので稿をあらためて論じることにする。

¹⁰ このインタビューを行ったインフォーマントらは、2002年の小泉純一郎総理の訪朝を契機に朝鮮学校と在日朝鮮人に対するバッシングが激しくなった時期に、すでに高級部以上に在学していた。そのためか、調査においてバッシングからの深刻な影響は見受けられなかった。インフォーマントが幼少時にバッシングの被害を受けていたら、語りは変わる可能性はあったと思われる。この点において、本論文は時代的制約を負っている。

¹¹ 2010年から実施された「高校無償化」の対象から朝鮮学校高級部が除外されたことに対する朝鮮学校関係者らの抗議活動は、在学生、保護者だけでなく、卒業生を含めた広い範囲の朝鮮学校在学経験者を網羅していることが、これを傍証する（たとえば2011年2月18日付『朝鮮新報』）。

文献

- 明戸隆浩, 2010, 「チャールズ・テイラー「承認の政治」論の再構成——「親密圏における承認」と「公共圏における地平の融合」」『現代社会学理論研究』第4号: 3-15.
- 朝鮮大学校, 2004, 『朝鮮大学校』(パンフレット), 朝鮮大学校.
- 韓東賢, 2005, 「メディアの中の「在日」と「朝鮮学校」、そのリアリティのありか」『現代思想』現代思想社, 33(4): 214-223.
- , 2006, 『チマ・チョゴリ制服の民族誌 その誕生と朝鮮学校の女性たち』双風舎.
- 浜本まり子, 1996, 「在日朝鮮人——在日朝鮮人のアイデンティティの問題——」青木保他編『岩波講座文化人類学 第7巻 移動の民族誌』岩波書店, 233-262.
- 福岡安則, 1993, 『在日韓国・朝鮮人』中央公論社.
- 金徳龍, 2004, 『朝鮮学校の戦後史——1945-1972(増補改訂版)』社会評論社.
- 岡真理, 2000, 『思考のフロンティア 記憶/物語』岩波書店.
- 『セフルム』編集委員会編, 2004, 『セフルム』朝鮮奨学会, 第10号.
- Taylor, Charles, 1994, "The Politics of Recognition", Gutmann, Amy ed., *Multiculturalism*, Princeton: Princeton University Press: 25-73 (=1996, 佐々木毅他訳「承認をめぐる政治」『マルチカルチュラルリズム』岩波書店, 37-110).

ウリハッキョをつづる会編, 2001, 『朝鮮学校ってどんなところ?』 社会評論社.

卞喜載・全哲男, 1988, 『いま朝鮮学校で—なぜ民族教育か—』 朝鮮青年社.

尹健次, 1992, 「在日」を生きるとは——「不遇の意識」から出発する普遍性——』『思想』岩波書店, 1月号 (Vol. 811) : 100-120.

在日本朝鮮人教育会中央常任理事会編, 1996, 『資料集・「在日朝鮮人の民族教育の権利」』 在日本朝鮮人教育会. 『朝鮮新報』 朝鮮新報社, 2010年4月21日, 2011年2月18日.

『毎日新聞』 朝日新聞社, 2010年11月9日.

(ちょう きょんほ、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程、kyongc@nifty.com)

(査読者、韓東賢、明戸隆浩)

“Korean School Community” and Ethnic Identity: A Study Using an Interview Survey among Students at Korean Schools *CHO, Kyongho*

The purpose of this study is to understand the characteristics of students at Korean schools, one of several ethnic schools in Japan. This study was carried out using interview surveys on students at Korean schools, and respondents to the survey are current students at Korean schools. Previous studies have pointed out that students at Korean schools have an ethnic pride, and find a mirror for their best self in people living in the Korean peninsula. It was also noted that they differ from the other young Koreans in Japan as far as identity conflicts are concerned. These points are, however, irrelevant and out of date. Previous studies have been affected by the motivating factor for the establishment of these Korean schools. Korean schools at that time had been established to prepare students for their return to the Korean peninsula. After the generational change among Koreans in Japan, “ethnic pride” has been overshadowed as the driving force among current students at Korean schools. Adoration for the Korean peninsula is no longer the motivating factor of these students. The results of this survey reveal that they have an affirmative feeling about themselves and their ethnicity. This is because they belong to a “Korean School Community” that expands and forms hubs through Korean schools.